

特別支援教育だより

三重県立特別支援学校伊賀つばさ学園 教育支援部 発行

平成 30 年度 第 3 号 (12 月 14 日)

お薦め書籍の紹介

少子化社会の今、小・中・高等学校で、児童生徒数が減少しているというのに、特別な支援が必要な子どもや、特別支援学校の児童生徒が増加しています。なぜでしょうね？

一つには、発達障がいの子どもの愛着障がいの子どもが増えているからのようです。

発達障がいと愛着障がいは、専門家でも区別が付きにくいほど、その症状は、似通っているのですが、長年、発達障がいの子たちに関わって来られた和歌山大学教育学部の米澤好史教授は、その経験から、心理学者ボウルビィが提唱した愛着理論の愛着(アタッチメント)の問題を抱える子どもたちの支援ケースが急激に増えているという実感があると、仰ってみえます。そして、米澤教授は愛着障がいの六つの誤解を紹介し、その一つに「育て方の問題という誤解」があると言っておられます。愛着障がいは虐待など、育て方の問題によるものだという過去の誤った世間の認識を、私たちは払拭する必要があると言えます。

米澤好史教授は、著書『「愛情の器」モデルに基づく愛着修復プログラム』(福村出版)や『やさしくわかる愛着障害』(ほんの森出版)の中で、「ADHD」は「行動」の問題、「ASD(自閉症スペクトラム障害)」は「認知」の問題、「AD(愛着障害)」は「感情」の問題なので、同じように見える「多動」も、ADHDは「いつも多動」、ASDは「居場所感喪失時に多動」、ADの多動は「ムラのある多動」と解説しておられます。原因が違うので、その対応の仕方も違ってきます。



著書の中から、もう少し紹介させていただきます。愛着が形成される過程で働く基地機能には、まずは、「安全基地」機能があります。次に「安心基地」機能があり、そして、「探索基地」機能へと進んでいきます。その過程の中で、愛着対象が担う安全基地・安心基地の代わりにするものに、「移行対象」というものがあります。愛着形成が十分でない子どもは、モノを触ることで安心基地を求め、歩くときに机や壁を触りながら歩きます。そんな歩き方をしている児童生徒は結構居ますよね。モノとの関係以外に、持っているモノを口に入れるとさらに安心感が増します。モノがない場合は、指を口に入れたり、衣服やハンカチを舐めたりします。これらは安心基地を求めての行動です。床への接触行動というものもあります。靴下を脱いで、裸足で床に接触する程度なら愛着の問題はそれほど大きくありません。大きな愛着の問題を抱える子どもは、より多くの接触面積、接触感を求めて、寝転んだり、這い回ったりします。人への接触行動などにも、愛着問題が関係しています。著書には、不適切な対応についても、記されています。そして、「愛着修復プログラム」も著されています。更に、「愛着形成・修復の支援が成功するためのコツ」から、「発達障害と愛着障害を併せ持つこどもの支援」なども紹介されています。是非是非、手元に置いて、困ったときなどに何度も読み返されることをお勧めします。

(文責 西口)

◆ 伊賀つばさ学園の主な行事 (3 学期) ◆

- 1 / 2 8 (月) 入学者選考願書受付(～1/31 木)
- 2 / 8 (金) 入学者選考 (予備日 2/12 火) (合格発表 2/14 木)
- 1 3 (水) 公開授業
- 3 / 8 (金) 卒業式
- 3 / 1 1 (月) 入学者選考 (再募集) (予備日 3/12 火) (合格発表 3/14 木)